



芭蕉記念館にて 写真:高村 達

吉行和子・

富士真奈美

おんなふたり

奥の細道

迷い道

吉行和子

富士真奈美

集英社インターナショナル

吉行和子・

富士真奈美

おんなふたり

奥
の
細
道
迷
い
道

吉行和子・富士真奈美 おんなふたり

奥の細道 迷い道 目次

第一章 俳句って…… — 7

『東京俳句散歩』を振り返り 8

句会はやめられない！ 13

ふたりの俳号の由来と趣味の世界 20

俳句仲間は感性の合う友達 32

第二章 芭蕉と『奥の細道』 — 43

人間くさく、屈強の男、松尾芭蕉 44

『奥の細道』松島の月を訪ねて 56

第三章 富士眞奈美(袈去)自選句集四十三句 — 85

「袈去」の句を語る 92

第四章 吉行和子(窓鳥)自選句集三十一句—— 95

「窓鳥」の句を語る 101

第五章 人生つて…… 105

あぐりさんと結婚 106

文系家族は変わつてる 112

好みの男は? 123

それぞれの生き方 128

あとがきにかえて 吉行和子 138

あとがきにかえて 富士真奈美 144

登場人物解説 151

イラストレーション 日比野尚子

ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

第二章 芭蕉と『奥の細道』

人間くさく、屈強の男、松尾芭蕉

吉行 今回、芭蕉で思い出してロシア映画の『父、帰る』（アンドレイ・ズビヤギンツェフ監督、二〇〇三年）っていう映画のパンフレットを再度見たの。

富士 日本の題名？ 菊池寛きくちかんの小説と同じね。

吉行 日本の題名。当時、三十九歳だったロシアの監督の作品なんだけど、すごく良いのでパンフレットを買ったの。その『父、帰る』は、あちこちで評判になり、賞もいっぱい獲った。監督がインタビュで「どうしてこういう映画を作ったんですか？」って聞かれた時「私は芭蕉から学びました」って。その時、私はまだ芭蕉とかピンと来なかったんだけど、ちょっとメモしてあったの。「何ですか？」との質問に「江戸の時代に、芭蕉は自分が求めるものだけを求めながら、あちこち旅をして、自然を見て生きた。それが素晴らしい。言葉も少なくいろいろな説明もないから」って書いてあったの。

富士 だって、五・七・五だからさ(笑)。

吉行 そういふ映画を自分は作りたかったと。確かに『父、帰る』、私は見てて良いなって思っただけけど、ほんとに訳がわからないの。男の子がふたりいて、突然お父さんが十二年ぶりに帰ってきて、そのふたりの男の子を連れて旅に出るの。弟のほうはすぐにパパって言うんだけど、お兄さんは今までほったらかしにされたことで反抗してて「アイツ」って言いながら、仕方なくお父さんに連れられて旅してて。ある時パッとお父さんが消えちゃうの。それだけなのよ。だけど、なんだかその映画が良くて、評判も良かったから上手に出来てるんじゃない。で、興味を持ってパンフレットを買ったの。そして「言葉はいらない」って。それは「私は芭蕉から学んで、みんなが感じれば良いんだ」って書いてあった。だから芭蕉ってロシアの三十九歳の青年にまで影響を及ぼしているなと思って。オリンピックでないけれど、その時だけは日本人として誇らしかった。

富士 文章もそうだけど余白とか余情って必要なのよね。

吉行 そういふこと考えないで、良い映画だなって思って見てたから頭に残っていたのね。だから俳句の、きつと二百年以上続いている昔の言葉なのに、今みんながこれだけ熱中して芭蕉、芭蕉って言ってるってことは、何か言葉が少ないだけに余計に残るのね。

富士 芭蕉は「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」と序文に書いて

るけど、それこそ「人生は旅、自分の生涯は旅」と言っているよね。風が芭蕉を誘い、芭蕉が風に身を任せる。そうした漂泊する心こそ、芭蕉の旅そのものだったといえると思うの。芭蕉は『奥の細道』出版にあたり「『道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸するより、松島の月まず心にかかりて、住める方は人に譲り、杉山杉風は別墅に移るに《草の戸も住替る代ぞひなの家》」って第一句を作るの。こういうところは風流よね。

吉行 でも、おとこの俳句だつていうのがわかる。お雛さまなんて女の人は作っているけど芭蕉が作るとやっぱりみんなが「ああ、芭蕉でもそんな気持ちになるんだね」といって。誰もいなくなつた家に誰かが来て「お雛さまを飾っているんだな」って。そういうほのぼのとした優しさみたいなのうに解釈するけど、嵐山光三郎さんが言うには、それはそうじゃなくて「古びた家が知らない間に立派に代わつていくという孤独感を詠んでいるんだ」って。男の人はそういうふうに解釈して芭蕉に感情移入しているのね。それに芭蕉はお雛さまがあるような生活してなかつたじゃない。だから、ここに幸せな一家が住んでお雛さまが飾られるのかな、って思ったのになつて。

「富士 さらに「舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり」。私たちには全然向いてないね(笑)。だつて

旅を栖にしてのたれ死にしてもいいなんて女の人思わないわよね。女は一所定住でき、一つの所に定住したいから巢を作るのよ。家庭を持って守りたい訳じゃない。私は「旅を栖にす」なんて言えない。自分の家の自分の匂いがする布団が大好き。「布団を栖にす」って感じ。その点、男の人は旅立って行って、旅で死んでも良いって。それを理想形にするっていうのは、男の生き方の一つの典型ってどうか。

吉行 でも、そうする人がいなくて、みんな出来ないから芭蕉に憧れるわけですよ。

富士 種田山頭火とか、尾崎放哉。

吉行 みんな憧れるけど、自分は出来ないのよね。

富士 でも『野ざらし紀行』なんかもそうだけど、まず旅でのたれ死んでもいいっていう思想というものは、ある種男の人たちの理想の形なんだと思う。芭蕉だけを女の人 gepanten ティック(学者ぶった)に掘り下げようとしても無理だと思う。何故かというと、芭蕉はね、男色かもしれないけど男の部分しか持っていない。別に旅に出て自分でご飯の支度をしたり、日常的に自立しているかどうかというと、そういうこともないわけ、必ずや随行する人がいたり、行く先々でパトロンがいたり。

吉行 そういう意味じゃ恵まれているよね。ブレーンがちゃんとしたわけですよ。それで行く先も決まっています。

富士 御輿みこしを担いでくれる。

吉行 行く先々でスケジュールが出来ていて、お金の調達もしてもらって。しかも昔のお金は重いのに持つてくれる。そういう意味じゃ幸せよね。人徳というか、それだけの才能があつたんでしょうけど。

富士 確かにあの頃の旅は草鞋わらじを履いて、杖を突いて歩いて行かなきゃならなかったから。芭蕉だつて頭を丸めて行かなきゃいけないがなかつたから。毎日毎日歩くつていうのは一つの哲学じゃない。歩きながら物を考えるつて、それが幸せだつたんだから、ちよつと旅心がつくと出て行きたくなつちやう。野ざらし願望があつたのね。その上でもつて、のたれ死が理想なわけでしょ。それはもう男の美学よ。その時はもう現実の生活は二の次だもんね。だから芭蕉に女が食い込もうとしても、とても無理だと思つた。全然基盤が違ふから。

吉行 そうでしょうね。

富士 だつてうちの父なんて六人の子どもがいて新聞記者で貧乏だつたのに、やっぱりお酒なんか飲んで酔っぱらうと「俺は畳の上では死ねない！」とか、「のたれ死にする！」とか言つて。酔い泣きして。それが男の一つの理想でもあるのね、のたれ死につて。だつてあなたのお父様だつて三十四歳で若くして亡くなられたかもしれないけど、ある種

緩慢かんまんな自殺じそくだもん。

吉行　ともかく家にいなかったらしい。

富士　放浪しているのよね。それは男の人しか出来ないじゃない。たまには男らしい女もいるけど、大抵は巢を作りたがるわよね。

吉行　そうね。だから女がもし芭蕉の生き方に憧れるとしたら、そういう自分に出来ないことをやっている芭蕉の生き方に憧れるだけで、自分もやりましようとはなかなか出来ない。

富士　だから男の人に芭蕉マニアって多いのよね。女の人はどうでもないでしょ。その芭蕉は『奥の細道』に旅立つ時「松島の月先心まゆにかかりて」って言うくらい松島に憧れていたのね。松島では、あんまり眺めが良くて、月がきれいで、とても句を作るどころではないって。持ってきた友達の手紙を読む。そういうの風流じゃない。旅の宿で、友達の手紙を読んだりする。

吉行　ほんとに一句も作ってないって。ある意味不思議というか、俳句って作れない時もあるんだなって。かえって面白いし、興味を引いたわ。

富士　曾良そらは作っているのよね。

吉行　きつといくつか作っただろうけど、自分のは発表出来ないくらい。

富士 でも曾良の句の《松島や鶴に身をかれほととぎす》っていうの、嵐山光三郎さんによると本当は芭蕉が作ったんだって。

吉行 でもやっぱり松島で何故俳句を作らなかったか、というのはある種の謎よね。あれだけの人だから作ろうと思えば作れるわけでしょ。でも、もつと良い句を作りたかったのかしら。曾良が作っているだけでしょ。

富士 そう《松島や鶴に身をかれほととぎす》。

吉行 だいたい曾良が作っても気に入れば自分の句にしちやったり(笑)。だからこの俳句は気に入らなかったのね。

富士 気に入らないのは曾良の名前にして(笑)。

吉行 結構謎だなと思って。何故松島で作らなかったかかってというのが面白くて。そんなところも嵐山さんは自由奔放で良いわよ。面白がっている。それにしても、松島の月が美しいという情報を、誰が提供したんでしょうね。

富士 西行さいぎょうとか能因法師のういんほうしとか芭蕉にとつて昔の歌詠みじゃない。

吉行 今の時代と違うんだから、どこからか噂が流れてきて。

富士 芭蕉は西行法師とか能因法師とか李白りはく、杜甫とほなどの漢詩もすごくよく心得てて、あちこち取り入れてたみたいね。私は原文を読んで思ったのは、『奥の細道』は後世に

残る立派な紀行文かもしれないけど、男の人が讚美する男のものなのよね。そう思わない？

吉行　ともかく三百年以上前に書かれた紀行文について、今現在でも多くの人が芭蕉、芭蕉って、いろんな物を書いてる、ということは、やはり凄いつていうことよね。私が思ったのは、これってある意味宗教みたいな、神様みたいな感じになっちゃって、芭蕉を知ることが、自分が生きていく上で必要だな、ってことになっちゃったのかしら。富士　年々歳々そうなって来たのね。

吉行　こんな時代だから日本には神つていないから。いるかもしれないけど。まあ、これから生きていくのに芭蕉に頼るのが一番だつて。

富士　俳諧師としての世界観とか美意識があつて戒かいた体したる者かくあるべし、ということから、こんなに立派な本になつたらしいわね。

吉行　凄いわよ。だから私はあなたに比べたら全然駄目だけど、今回芭蕉の本をって思った時に、とりあえず栗田くりだ勇さんが書いた本が一番派手で、分厚くて、金の文字で『芭蕉』って書いてあるのを、取りあえず買いました。（『芭蕉』、祥伝社、一〇一七年）すごく高かったけど（笑）。それでも『奥の細道』まで行かなくて。それこそ参考文献だけでも何頁もあつて。栗田さんは俳人ではないのでしょうか。作家だし、評論家だし、その人

が日本人は何故、ここまで芭蕉が心に響くのかと、芭蕉について本気で考えようって思っちゃったことは、何かそれだけでも凄いなって思ったんだけど。

富士 嵐山さんの御本も読んだでしょ。

吉行 嵐山さんは一心同体のような人じゃない。嵐山さんにとって芭蕉は良い友達よね。芭蕉がいたから随分いろんな物が書けたじゃない。

富士 いろんな方が芭蕉について書いていらっしやる訳だけど、根底にあるものは、やっぱり俳諧師はかくあるべし、かくありたいと願う形に構成し直しているって。創作的な旅日記なんだって皆さんおっしゃってるわけね。

吉行 だから芭蕉がいて、ちよつと考えてみようかって。嵐山さんに関しては、学生の頃から芭蕉に引っかけかって、芭蕉が歩いたところにひとりで行ったりしている訳じゃない。それから現代に至るまで芭蕉のことをやっている人とまたちよつと違うかもね。俳句をやっている人が芭蕉について考えるのと、学者の栗田さんが考えるのとは、芭蕉とのとっかかりはみんな違うよね。

富士 『奥の細道』を読んできると「山をよじ登り、崖を下り……」とか凄いじゃない。

酒田から金沢まで抜けるのに九日くらいかかって。百二十里だって。人間一里をせつせと歩いて一時間だから。それを歩いたっていうのは凄いと思う。

吉行　しかも草鞋でしょ。今みたいに歩きやすい靴なんてないんだから。

富士　持病抱えてね。女の人なんか生理があるから月にいつぺんは休まなきゃならない。あ、更年期過ぎて生理が上がってから行けばいいのか。

吉行　それに、昔のお金は重いんだから。それを曾良に持たせたらしいけど。曾良がない時は自分で持ったのかなあ。

富士　男同士しか行かないのよね、旅に。

吉行　そうなのね。

富士　それもやっぱり男の美学なのかしら。女連れじゃいろいろ揉めるもんね(笑)。

吉行　そうね。だから女はどこかに置いていて。で、会いたい時に行ったんでしようね。

富士　妾めかけって置いておくのね。どうも私が芭蕉に色気を感じないと思つたら、芭蕉は他に色気を感じてるんだもんね。

吉行　そうらしい。だからたいてい付いてきている男の人はきつと写真も何もないからわかんないけど、好みがあるんじゃない。

富士　杜国とくになんて人、あの米屋の杜国。すごい美青年だったんでしょ。名古屋の人で上級の町役人を務めた富裕な米穀商。野ざらし紀行したり、吉野に行ったり、須磨とか明石なんかも行って俳句を作ったり。芭蕉さん、この人のこと大好きだったみたい。それ

に金沢こすぎの小杉いっしやう一笑。「去年の十二月に死んでました」っていう人。

吉行 曾良に関しては一番一緒に行つたにもかかわらず、余り書いてないわね。

富士 曾良は幕府の隠密だつて説も(笑)。だとしたら、あくまでもお目付役。嵐山さんの本を読んだと、あの人もこの人もみんな隠密で、幕府のスパイ。

吉行 嵐山さんは今までの芭蕉像をひっくり返そうと書いているから面白いけど。読むほうはこんがらがっちゃうね。

富士 でも、嵐山さんの芭蕉も魅力的よね、屈強で。『芭蕉紀行』『芭蕉』という修羅。』

吉行 すごい魅力的。これなら面白いって思っちゃうけど、果たして本当の芭蕉なのか。富士 そうだね。俳聖芭蕉になっちゃうと窮屈だもんね。本来の芭蕉は水道補修工事人としての腕は確かだった。あの神田上水の治水工事なんか芭蕉がやっている。人を心配するのが上手いし、お金のやりくりも上手いのね。ああいうの読むと面白いんだけど。あんまり面白がつてばかりもいけないんだけど。

吉行 でも、嵐山さんは目一杯面白がつているじゃない。芭蕉もフィクションがすごく多いって言うけど、それにまた嵐山さんがさらにフィクションするから、読み物としてはすごく面白いし、私も嵐山さんの書く芭蕉ならちよつと好きになるって感じ。

富士 そうよね。嵐山さんの書く芭蕉はほんとに人間くさく、屈強しやうどうの男。あの衆道しゅうどうが面

白いよね。女を寄せ付けないというか。でも、すごく勉強もしていき。芭蕉が藤堂家の若殿の良忠(蟬吟^{せんぎん})に最初に料理番として仕えた時、蟬吟を師として俳諧を始めたのよね。

吉行　そこが、芭蕉の凄さでもあるのね。

富士　あの時代の人にしては凄く勉強したんでしょうね。免許皆伝になって江戸に出るのよね。あの時もう三十歳過ぎているのよ。江戸で名前を挙げた時は三十二、三歳。

吉行　でも、そういう性格かはわからないのね。

富士　わからない。

吉行　せっかちだったとか、怒りっぽいとか、そういうの全然ないでしょう。

富士　ない。

吉行　そういうところが少しでもわかると面白いんだけどね。

富士　でも痔があったことだけは確かだし(笑)。

吉行　痔くらい駄目ね(笑)。石持ちってあったけど、石は痛いよ。私は腎臓結石になったけど、すごい痛さ。でも、ちょっとだけ人間ぽいかな。何かさ、女に惚れっぽいとか、何かあってもよさそうなんだけど、全然ないのよ。周りが隠していたのかしら。イメージが壊れるとか、または、奥さんみたいな人がいたから、その人が怖いからとか。

でも遠くにいたから、今みたいにバレないからね。

富士 私たちは「高く心を悟りて」は駄目だね。「俗に帰るべし」は何時でも出来ちゃうけど(笑)。

吉行 曾良が一生懸命フォローしてたのよね。すごく出来た人なんだろうね。わがままをちゃんと聞いてあげて。

富士 旅館へ行けば旅館でご飯食べられるわけでしょ。料理作るわけでもない。旅館に気の合う人とふたり旅、楽しいわよね。で、俳句を作る。各地で弟子や尊敬する人たちが待っていてくれてすぐに連句をしたり。

吉行 すごい生活よ。

富士 いい生活よね。上げ膳据え膳。

吉行 で、浮浪者だからって追い払われることもないんだもんね。

『奥の細道』松島の月を訪ねて

富士 千住せんじゅから出発する時は悲壮な決意を持っての門出だったけど、《行く春や鳥啼なき魚うおの目は泪なみだ》。私はこの句がシュールでも良いなと思っていたのが、「魚」っていうのが杉山杉風というパトロンのことなのが面白いのね(笑)。魚屋、鯉なんか扱ってる。吉行 そうなの。私もこの句がとっても好だし、このとおりなんだけど「魚の目」が濡れているのは、ただ濡れているんじゃない、泪で濡れてるんですよっていう感じがね。富士 この解釈面白いわね。

吉行 でも嵐山さんしてみると、それは杉風さんのことを思ってたって。何代後か知らないが杉風さんの子孫から手紙が来たって。「そうです。我が家ではそういうふうに伝わっています」って手紙をもらったって。

富士 正しいってことね。

吉行 「正しい」って手紙が来たので「やった！」って。勝手に想像して書いたら事実だったって。

富士 それなら「鳥啼魚の目は泪」は素晴らしい表現よね。十七文字にきれいに収まっている。最初読んだ時、何のことかと思った。

吉行 だから別れる時に杉風の目に涙があったってわけね。

富士 私はこういうシュールっぽいのが好き。あの名古屋の米屋の美青年、杜国って

う男と旅した時、明石で作ったのかな《蛸壺やはかなき夢を夏の月》っていう句もほんとに好きなの。芭蕉とは思えないようなエモーショナルな句で。ずっと後世だけど大俳人・高浜虚子の《川を見るバナナの皮は手より落ち》も、何なんだろうと思うけど、ミステリアスでとても良いじゃない。好きだわ。

吉行 そうよね。私、千住と言えば劇場があるので時々行くの。

「千住にて夏の夜の夢観劇す
窓鳥」

「白日傘千住の駅に忘らるる
傘去」

富士 千住を出て東北に向かう途中の黒羽で作った《夏山に足駄を拜む首途哉》これ本当に芭蕉が作ったのかしら。良いと思う？（笑）。
吉行 でも、こういうのも作っちゃうんじゃないの。

「鬼怒川のライン下りやダウン着て
窓鳥」

富士 《田一枚植て立去る柳かな》私これは好きなの。それに《風流の初やおく

の田植うた》はのんびりしているわね。

吉行 私は《世の人の見付ぬ花や軒の粟》結構好きよ。だって他人と違っていろいろ大切じゃない。

富士 《笈も太刀も五月に飾れ帟幟》は面白くないわね。

吉行 うん、面白くない。仙台で詠んだ《あやめ草足に結ん草鞋の緒》を読むと、そうだと時はこんな履き物しかなかったんだなって。でも、やはり風流だなと思う。読んでも何てことないんだけど、やっぱり厄除けみたいに前途の幸福を祈って草鞋の緒にあやめ草を結んでくれる。

吉行 虫が来ないんでしょ、虫は紫色が嫌いで。でも、あやめ草っていうと綺麗で。

富士 何かあるらしいわよ。

吉行 蛇とか来ないようになって。

富士 そう言えば、山刀伐峠辺りはマムシが出たらしい。

吉行 多分、マムシ除けで草鞋にあやめの花を挟んだのよ。私疎開していた時、草鞋編んだわ。

富士 え、ほんと？ 似合わない。

吉行 みんな編んでたから、私もまねして編んだの。山梨の山奥に疎開していたんだけ

ど、みんな草鞋履いてたのかしら。

富士 田舎はみんな草鞋よ。

吉行 私も履いたことがあるから、足の裏にあの感触は残っているわ。

富士 私の村は流石に草鞋はなかったかな。

吉行 鼻緒なんか色を入れたりして、楽しかったわ。大人とみんな座って編んだの。今編めって言われても出来ないかもしれないけど。

富士 そしてふたりは松島にたどり着く。私たちもあとを追って旅したのよね。芭蕉は松島の月のあまりの美しさに、俳句が作れなかったけど、あなたは作ったんでしょ。

吉行 数句ね。丁度お世話になった宿が「海辺の松を守るように佇む宿」をうたい文句にしている小松館好風亭っていう旅館で、部屋から眺める月と松、そして松島湾の海が絶景なの。イメージが湧いてくる。

窓鳥 松島の月に想う

松島の月見るために訪れる

水色の空松島の月のぼる

雲いでて月隠しつ流れゆく

夜がふけて月堂々の主役なり

松島の月に添い寝の一夜かな

富士 私は翌日東日本大震災の被災地、石巻いしのまきを訪ねたの。紹介された呉服屋「かめ七しち」の女将さんが和服姿で車を運転し、いろいろ案内してくれたの。でも、生まれてこのかた見たことも、体験したことも無い悲惨さを目の当たりにして言葉を失った。被災地に吹く風が心底染み渡り、言葉がなかなか浮かんでこなかった。

袂去 松島と震災被災地・石巻に想う

松島や海苔漁の景整然たり

松島や半月掲げて波閑か

同行二人腰痛我に咳の友

「二階まで津波」とかめ七呉服店

ドライバーは和服の女将枯野行く

北上川辿れば枯野広ごりぬ

蛇の目寿司海鞘ほやというもの初見参

汗のりヤカー北上撮す友のあり

小春日の仮設住宅寂寞たり

津波禍の荒涼茫と秋の暮

石巻の真昼赤のまま群るる

佇ち尽す大川小学校・晩秋

年老いし案山子の肩に烏かな

富士 芭蕉は、このあと平泉ひらふみに出るの。芭蕉の句で俄然がぜん良いのは平泉よ。《夏草や兵つわものどもが夢の跡》《五月雨さみだれの降ふりのこしてや光堂》。吉行 《夏草や兵どもが夢の跡》は有名よね。芭蕉とは知らなかったけど、私ですら知っているんだから。

富士 俄然良くなるんだけど、ここでさんざん泣くところがちょっと。その昔光源氏など何かあると泣いているけどさ、韓国ドラマじゃないんだからさ。男の人が泣くって

うのも良いのかなあ。

吉行 どうなのかしら。本当に泣いている訳じゃないのかもしれない。

富士 誰かが「男の涙は文化である」って言ってたけど。

吉行 でも自分で泣くって言っちゃってるんだから。

富士 涙が溢れて止まらないって感じね。あの義経よしつねが好きみたいね。平泉に義経を庇かばつた館がある。そこで奥州藤原氏に討たれちゃうんだけど、弁慶の立ち往生と一緒に。その義経を偲んで涙が流れちゃうのよ。

吉行 感受性が豊かなんじゃない。

富士 芭蕉がしとどに泣くっていうのは、弟子の曾良の前で泣くのかなあ。男同士ってそういうの平気なのかしら。

吉行 本当に泣いたかどうかはちよつと。曾良が「芭蕉が泣きました」って書いてくれなきゃわかんないけど。

富士 『奥の細道』自体、亡くなって六、七年してから出てるんでしょ。だから芭蕉がより素敵に見えるようにまとめてあることはある。

吉行 そうか。

富士 泣いたほうが良いのかも。「袖を濡らす」とか「枕浮くばかりに」とか。

吉行 そりや泣いたほうがインパクトはあるけど、本当に泣いたかどうかはわからないじゃない。俳句として泣いたって書いたのかもしれない。

「臙おぼろの夜光堂にてねまりたし 衾あふ去」

富士 尿管しよまゑの関での《蚤虱馬のみしらぬまの尿管しよする枕もと》は？

吉行 何かかわいそうね。そういう生活もしていたんだ。そういう羽目にも陥っちゃったんでしょ。

富士 かゆくてかゆくてしょうがないのに、枕元でジャーツてやられちゃったのね。嵐山さんによると、この句は実態なしだった。

吉行 大変よね。予約なんてない行き当たりばつたりの旅だから。

富士 同じ宿にしても尾花沢おなばざわでの《涼すずしさを我宿わがやしろにしてねまる也》が良い。「ねまる」って「寛あまぐ」って言うことね。

吉行 でも「ねまるなり」ってすごく頭に残っちゃって。何か「ねまるなり」って言いなくなっちゃう。「ぼちぼちねまりましようか」とか。何処どこにも使えないけどね(笑)。

富士 尾花沢での《まゆはきを俵おむかひにして紅粉べんの花》も好きなの。綺麗で色っぽいで

しよ。

吉行 芭蕉は余り色っぽい句がないもんね。「まゆはき」って女の人がやるわけでしょ。見てたのね。

富士 見ていたのか、ただ想像してたのか。

吉行 知ってたっていう訳よね。ビューラーを知らない男がいてね。私がメイクしていたら何してんですかって、とんできたことがあったの。女を知らない男なのよ。

富士 まさか女装はしないでろうから。いま時分「まゆはき」やってる男多いじゃない。

吉行 そう男の人眉毛描くね。最初スキージャンプの船木和喜ふなきかずよしっていう人が描いてた。随分前よね。

富士 船木のジャンプは世界三大美しい物の一つだと思ってた。美男だしね。

吉行 あの時、随分話題になったね。男が眉毛を描いたって。今当たり前になっちゃったけどさ。

富士 あの人きれいな飛形してたのよ。だから素敵だと思っただけど、やはりアスリートみたいに、今に生きる人の肉体が衰えるのは寂しいよね。だから芭蕉みたいに五七五でこんなに残るってことは大変なことなのよね。

吉行 《閑さや岩にしみ入蟬いるせみの声》は、嵐山さんに言わせると、蟬の声を聞いたとき

先人を思い出したって言うのね。とはいえ嘘か誠かわかんないけど、嵐山さんが勝手に考えたのかも。

富士 でも想像で物を書くっていうのはハイブローなのよ。

吉行 そうよね。

富士 中尊寺の金色堂はずっと好きだったわ。《五月雨の降のこしてや光堂》《閑さや岩にしみ入蟬の声》は、今でこそ名句として代表にあげられるけど、もし何も知らないで句会に紛れ込んできたら選ばれないかもね。

吉行 これはラブロマンスの句って訳でしょ。好きだった男を偲んで。

富士 藤堂家の若殿ね。蟬吟さん。

吉行 そういうのも、勝手に三百年も前の人のことだからって思えるのも俳句の良いところね。

富士 そう良いところ。想像は読み手の特権よ。

吉行 言葉が少ないからね。小説だったらそこまでは変えられないでしょ。

富士 でも芭蕉自身は「人間は長い間自然に生かされてきた。人間は自然の中ではとても小さな存在」を実感するのね。自然の美しさ雄大さに魅了される半面、厳しい自然に遭遇する。その代表的句が《五月雨をあつめて早し最上川》だと思うの。

吉行 常に自然の中に自分を置き、自然を肌で感じてるのがよく表現されてる。この句も有名よね。

富士 そう。「早し」を最初「涼し」にしたんでしょ。実際五月に二回最上川を下る船に乗ったことがあるけど、最上川って雪解け水がすごいよ。川の片側の崖の上から滝みたいに見える。雪解け水が流れ込んでくるの。ほんとに怖いから。「早し」って言うより重い感じの川。

吉行 へえ、集めてって感じなのね。

富士 水が滝のように落ちてくる。

吉行 良いわね、この句もね。

「羅^{うすもの}や耳に紅さし尾花沢 衾去」

富士 出羽三山での句は《雲の峰幾つ崩れて月の山》の一句だけが好き。

吉行 すごく覚えやすい。

富士 覚えやすい？(笑)。きれいな句よね。映像は夕景が素敵かも。

吉行 きれいよね。

富士 湯殿山ゆどのさんで作った句《語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな》って、女の人を作ったみたい。

吉行 「語られぬ」って謎よね

富士 結構現代的だね。でも「袂をぬらす」って言うのは昔の人の表現だね。

吉行 何で語られなかったんでしょうね。

富士 何でしょうね。でも俳句の中の旅情とかシリアスなところが良いね。

吉行 だから「湯殿にぬらす袂」の女がいて、それについてちよつと語れないんですよってことですよ(笑)。そこは詳しく聞かないでくださいって。

富士 なんか月山がつさんから湯殿山は、駆け下りる感じの山だって。そして余り有名じゃないけど酒田の句《あつみ山や吹浦ふくうらかけて夕すずみ》、それに《暑き日を海に入れたり最上川》。この句はスケールが大きくて良いわね。

吉行 いいわね。やっぱり良いのは有名になっちゃうわね。

富士 有名だから良いのではなく、実際良いと思うわよ。

吉行 だから私みたいに何も知らなかった人でも知っているというのがポイントなのよ。

富士 す〜つと入ってくる。山形県って結構夏なんて暑いよ。果物がとってもよく穫

れるってことは、お日さまが照ってるってことなのよ。冬は雪ですごく寒くて寒暖の差が激しいんですね。よくさくらんぼや、だだ茶豆やお米を送ってくださる人がいるの。山形好きだわ(笑)。《象潟や雨に西施がねぶの花》を詠んだ象潟は行ったけど何もなかったから、ちよつとがっかり。

吉行 何もなかったわね。ないところで詠う。

富士 芭蕉が行った頃の象潟は水が張って、綺麗な潟だったんでしょね。私たちが見たのとは全然違う。まるで干上がった田んぼみたいだったね。

吉行 きつとそうね。やはりねぶの花が咲いていたから良かったの。こういう花か知らないけど。それに雨。

富士 合歓の花でしょ、私、合歓の花好きよ。実家に咲いていた。原文では象潟のことを「江の縦横一里ばかり、俳松島にかよひて、又ことなり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし、寂しさに悲しさをくはえて、地勢魂をなやますに似たり」だって。象潟は陰の感じで、松島は陽だから詠めなかったのかしら。

吉行 あまりにも大きすぎて。

富士 松島ではお月さまを見てうっとりしちやったのよ。松島と月。芭蕉の頃には人工的な物が何もないから。

吉行 じつと見てたのね。

富士 また泣いたかもね。さめざめと。

吉行 それで俳句も作らなかつたんだから駄目ね(笑)。

「冬の日のなんと明かるき日本海 衾去」

富士 そして酒田から金沢に行くんだ。百三十里(約五一〇km)。その間九日間。そこで詠んだ句が《荒海や佐渡によこたふ天河》と、芭蕉には珍しい色っぽい句《一家に遊女もねたり萩と月》。

吉行 色っぽいと言つても、ちゃんと女の人がいたんですもんね。全然書かないけど。

富士 でも嵐山さんの本によると、遊女はフィクションだって。

吉行 そういう句つてないじゃない。で、自分はしっかり彼女がいるわけじゃない。《一家に遊女もねたり萩と月》。それにしても置いてきた女の人のこと全然書かないのね。この句で思い出すのは、ちょっと昔、岸田今日子さんとあなたと二人でドラマの撮影で佐渡に行ったこと。

富士 行つたわ。たらい舟に乗つたり。私あそこで佐渡情話の女の子の悪口を言つたら、

罰が当たって転んで腕折っちゃった。撮影の初日だったのに。

吉行 そうだった。

富士 罰が当たったの。ギプスして、夏だからかゆかった。

「越中路海市の船に二人ゐる 袞去」

吉行 船で渡る時、私は船酔いしちゃって、流石に荒海なんだなあって。すごく揺れて。

富士 越後から佐渡に行く船はロールス・ロイスのジェットエンジンなの。

吉行 あら、そう？

富士 快適だったじゃない。

吉行 でも揺れたわよ。

富士 怖かった？

吉行 怖くはないけど気持ち悪くなった。でも「天の河が出る時は海は荒れない」っていう説があるのね。だからこの句は創作だって。

富士 そうそう。嵐山さんが創作だって書いてあった。

吉行 嵐山さんのせいにして。

富士 良いのよ。面白くしてくれる分だと何でも良いの。このところは「今日は親しらず、子しらず、犬もどり、駒返しなど云北国一の難所を越えて」、もう疲れ果てて「枕を引よせて寐たるに」、遊女ふたりが喋っていて。市振の遊女は「最後の国新潟と云所の遊女成し」。

吉行 でも良いじゃない。ちょっと遠い所だけど遊女が寝ているんだなって。

富士 どこかに書いてあったけど曾良は芭蕉と「同行二人」って笠に書いてあった。「同行二人」って、私とあなたなんだけど(笑)。

吉行 ほんとよ、助け合っついていかなきゃ(笑)。

富士 「曾良にかたれば書きとどめはべる」って書いてある。

吉行 でも遊女が寝ていると思うと、ちょっと浮かれて気持ちが悪ざわしちやうかもね。

富士 「黒部四十八が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出づ。担籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものと、人に尋れば、『是より五里、磯つたひして、むかふの山陰に入り、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ』といひおどされて、加賀の国に入」。そこで小杉一笑の訃報を聞いたのね。一笑に会うのを楽しみに金沢に行ったのに。七月の十五日頃に行ったのね。そうしたら去年の

冬に死んでしまっていたと聞いたので、一笑の兄と追善を催して《塚も動け我泣声わがなくは秋の風》。また泣いている。「我泣声は秋の風」って。ここまで書けば気分が晴れるわね。清々しない？

吉行 すごいよね。「塚も動け」だもの。大げさよね。

富士 でも、こういうふうには詠んじやうと後はケロツと出来るわね。私最初にこれを読んだ時、笑っちゃったんだけど(笑)。悪かったわね。男の人も泣くのか、よっぽど会いたかったんだね。愛していたんだ。句友の死は悲しいものね。

吉行 男は一生で何回くらい泣くのかなあ。

富士 昔は親が死んだ時って言ってたけどね。

吉行 声を出して泣くって言うのは、そうそうあることじゃないでしょ。

富士 慟哭どうこく？

吉行 女は結構あるけど。

富士 女は嘔泣おうせききもあるから(笑)。

吉行 女の涙は信用できない。涙の流し方が上手だから。

富士 私別れた夫から言われたよ。「君の涙を一度見たかった」って(笑)。私たち下手かもね。女優なのに。

吉行 そうね、私なんか特に駄目だね。

富士 もっと上手に泣けば良かった。涙は女の特権なのに。

吉行 でもあなたなんか友達が死んだ時、ちゃんと泣いたじゃない。私泣けなくて困っちゃったもん。悲しいのに(笑)。

富士 涙腺がひからびたのかしら。

吉行 本当に隣で富士真奈美がしっかりと泣いているのに。

富士 え？ 誰が亡くなった時？

吉行 今日子さんが亡くなった時。

富士 今日子ちゃんはそうよ。長い親友だもの。特別悲しい。

吉行 私だってしっかり悲しいけど全然涙が出てこない。

富士 女だからよ。あなた、男の人が亡くなったら話は違うでしょ。私は男女分け隔てしないの。

吉行 ほんと泣いたことないんだもん。母だって妹だって兄だって亡くなった時全然泣かない。

富士 随分たってから悲しくて泣いたって。

吉行 あなたから手紙もらって、あなたの書いた手紙を見て。淳之介の時、初めて涙が

出た。

富士 じゃ、私あなたのために良いことしたのね。

吉行 だから、ああこういう時泣くんだと思った。

富士 その時にくれた手紙取ってある。

吉行 その時、自分でびっくりして。泣いたことにびっくりした。

富士 「さめざめ」って書いてあった。

吉行 そうだっけ。まあ、あなた手紙取っておかないでよ(笑)。

富士 でも良い手紙だったんだもの。珍しくとっても素直で。

吉行 ほんと泣かないよ私。

富士 どうしたんだろう。小さい時、病気であんまり苦勞したからじゃない。

吉行 自分でね「あっ、泣きそう」っていう時があるの。子どもの時疎開していて、久しぶりに兄が疎開先に訪ねてきたの。母と妹が喜んでまわりついて、私は喘息ぜんそくで寝ていたの。兄が母に「ちょっと向こうの部屋で話しましょう」って言って母を連れて行って、「私も行く」って言ったら「お前は喘息だから駄目だ」って言われたのよ。その時凄く悲しくて。

富士 それで泣いたの？

吉行 それで、泣きはしなかったけど泣くっていうのはこういうことなんだって。グーッとかみ上げてきて。喉に丸い石が詰まったみたいに痛い。でもボロボロとは泣かなかった。それが一番悲しかった。

富士 あなただけ仲間に入れてくれなかったから？ 何の涙なんだろう。悔し涙？

吉行 寂しかったのかな。

富士 あるいはお兄さんが好きなのか。

吉行 折角訪ねてきてくれたのに。

富士 訪ねてきてくれた時、既に気持ちが高ぶってたのよ。だから仲間に入ってたよ。とでもそばにいたいと思ったのにつまはじきされたから。それで意味もわからず勝ち気根性の悔しがり屋の部分が出てきたのよ。それで泣いたのよ。

吉行 それを今でもすごい思い出す。喉がすごく痛くなって、涙が上がってきて。

富士 しめしめ。それだったら素直に泣いちゃったら楽なのよ。

吉行 それでも涙が出ない(笑)。

富士 どうしてなんだろう。どこまで負けず嫌いなんだ。

吉行 何なんだろう欠陥人間？

富士 欠陥人間かもね。恋愛関係では泣いたことない？

吉行 うん、だからドラマでも大変なの。「泣け」って言われても泣けやしない。

富士 「泣けるまで待ちます」って言われたらどうするの？

吉行 嫌だねえ。困るね。

富士 「目薬、目薬」って。しょうがないなあ、折角女に生まれたのに。

吉行 ほんとよね。泣いて可愛くなりたい(笑)。

富士 涙のひとつもこぼさねば。

吉行 そうよね。

富士 金沢でのこの句も好き。《あかあかと日は難面つれなくもあきの風》。そのとおりの俳句なんだけど。「つれなく」は「難面」って書くんだけど。

吉行 へえ。あなたよく字知ってるものね。だいたい句会で良いと思っても読めないのがあって、これを取ったって読めないし……。

富士 今度平仮名で書いておく。

吉行 何でそんなに字知ってるのかしらね。

富士 《しほらしき名や小松吹萩ふくすすき》は良くないよね。《むぎんやなま甲ていの下もとのきりぎりす》は良い。

吉行 そう、これは良い。

富士 元源氏の武将だったのが平家にくつついて、木曾義仲きそよしなかと戦って首を打たれ白髪を染めていたおじさんの武将。それを見て「この甲がそうですよ」って。そうしたら、また芭蕉は泣いたのよ。

吉行 「むざんやな」から始まるの良いわね。でもこの頃「むざん」っていう言葉使わないね。

富士 「むざん」って使わないけど「むざん」っていいわよ。で、その後ふたりは山中温泉に行きました。

吉行 行ったことある？

富士 一度行った。

「姫百合や昏くれて湯の香を楽しめり 衾去」

吉行 私ないなあ。でも《石山の石より白し秋の風》は良いでしょう。

富士 これは良いわね。

吉行 芭蕉の俳句には「石」が随分出てくるわね。やっぱり自然の中で「石」って強い
のね。

富士 「石より白い秋」ってあるけど「白秋」っていうのもある。

吉行 石が雨風で白くなっているんだもんね。

富士 それに比べ次の《山中や菊はたおらぬ湯の匂》においは余り良くないと思わない？

吉行 「石より白し」で力を入れすぎちゃったから、ちよつと手を抜いたんじゃない。

富士 ここで曾良がお腹痛くなっちゃって。病気になって、お先に知り合いのお医者さんがいる所に行っていないなくなっちゃうの。

吉行 何の病気だろうね。

富士 「曾良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりあれば、先立て行に」ゆくって。で、大垣で再会するのよ。長島か。いいなあ。

吉行 また来てくれたんだから、大した病気ではなかった。

富士 でもその間ひと月くらいあるのかなあ。

吉行 我慢できなかったんだ。

富士 何でこのふたりよく下痢するんだろう(笑)。

吉行 芭蕉を置いて行くくらいだから、よっぽど苦しかったんだ。

富士 あるいは嵐山さんによれば、また違うかもよ。

吉行 ストレスがたまりすぎたんじゃない。

富士 ここでは俳句で応答するのね。曾良が《行行てたふれ伏とも萩の原》。大げさね。それに芭蕉は《今日よりや書付消さん笠の露》って返して。同行二人の情愛だから。

吉行 怒ったのかなあ。置いて帰っちゃうなんて、もうちょっと我慢すりやいいのにと
思つて。

富士 結局、全昌寺に泊まることになるんだけど、前の日、曾良も同じ寺に泊まつていた。で、《終宵秋風聞やうらの山》の句を残して。そして永平寺に寄つて福井に行く。福井には等裁さんという人がいて。源氏物語の夕顔のような奥さんがいるのよ。「侘しげなる女の出で」夫はちよつと外にいますからつて。芭蕉がその家を訪ねていつて、そこでみんなで楽しく遊ぶんだ。

吉行 この頃は芭蕉も引く手あまたでしょう。何処へ行つても大歓迎される。

富士 有名人。行くと諸手を挙げて「よくお越しくございました」みたいなもんだよ。その後、遊行の砂浜というところに行く。《名月や北国日和定なき》

吉行 ただ、そのとおりの句なのよ。

富士 《月清し遊行のもてる砂の上》私この砂浜、種の浜にも行つたことがある。

小貝を拾つたりしたんだけど。《浪の間や小貝にまじる萩の塵》

吉行 貝つて確かに子どももの頃拾つて楽しかった。

富士 楽しかったよね。

吉行 その頃はとんとそんな感じしないけど、いろんな貝があつて見つけるの楽しかった。さくら貝なんて見つけると嬉しかった。

富士 楽しかったね。芭蕉はその後、馬に乗つて大垣に入った。そこに曾良が来てた。如行じょこうという人の家に大勢の人が集まりわいわい楽しんだけど、そこでお別れね。《蛤のふたみにわかれ行ゆく秋ぞ》。

「句友ゐて紙商ひす石路つわぶきの花 衾去」

吉行 ここでみんな別れるんだけど、特に悲しかったでしょうね。

富士 「蘇生のものにあふがごとく」つて。「蘇生」つて生き返るつてことよ、「且かつ悦び、且かついたはる」なんて言つて。男ばかりで、どう？

吉行 お茶なんか持つてくる女の人はいたのかしら。

富士 どうなんだろうね。みんな男がやるんじゃない。

吉行 男がやるの？

富士 だって、みんなお弟子さんみたいなもんで。お金持ちだった。医者も多いのね。
(寶井) 其角なんかも藩医の息子なのよ。芭蕉より十六、七若いんだけれどすごく頼もしい。あの人がまとめたんじゃない。

吉行 芭蕉って食べ物の話余り出てこないね。俳句の中にもないでしょ。

富士 ないわ。あんまり食べないのかしら。

吉行 何かにそばが好きって書いてあったけど、俳句には書かない。

富士 「武士は食わねど高楊枝」。食べ物のことなんぞっていうんじゃない。

吉行 そうねえ。

富士 堅苦しい芭蕉の話をしたって窮屈だもんね。

吉行 そう。だから、それだけ読んでいたらとつても遠い人で、別に今の私に必要ななってパスしちゃうと思うけど、余りにも人間っぽくて。本当はこれだけじゃ駄目なんだと思って、本気で芭蕉のことを書いてるものに戻る訳じゃない。それはそれでまた面白い。

富士 『奥の細道』を味わいながら読んでいると、人間・松尾芭蕉は面白いわね。

吉行 人格化されている芭蕉だけれど、その中に何かがあるのが面白いと感じる。

富士 面白いわね。旅自体、諜報の仕事がからんでいたわけで、そのあたりの秘密をぬ

かりなく消して、ようやく紀行文として完成させた時、芭蕉さん没。自筆の最終推敲本を曾良に預けて、芭蕉没後九年。つまり東北の旅をして十四年たってからやっと出版された『奥の細道』。これだけ年月をかければ、完全無欠、史上不滅、名紀行文、文学作品として世に残るわけよね。素晴らしい人知の結集です。

吉行和子・富士真奈美
おんなふたり 奥の細道 迷い道
吉行和子 富士真奈美・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：1,400 円（本体）＋税
発売日：2018 年 8 月 24 日
ISBN：978-4-7976-7357-9 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)